一一　松子台物語

雄物川町の二井山から水沢に行く途中に、七滝という風光のすぐれた滝がある。水源を武道の強清水に発し、樹葉をふるわせながら七段に落ちる白瀑は、黒岩三〇尋（約三〇メートル）に及ぶ断崖と調和してすばらしい絶景である。

この断崖を山羊巌といい、昔は羚羊が棲んでいたといわれる。七滝川にかかる丸木橋を渡り、山道を一丁（約百十メートル）ほど登ると日の宮嶽があり、不動明王を祭っている。この山裾にある山道を登ったところに松子台がある。極楽寺から武道に通ずる道路の中ほどにある台地である。

ここに樹齢およそ千年は経たであろうと思われる松の老木があった。（数年前の暴風雨で倒れた）。武道から大森の市日に、木炭や山菜を背負って売りに行き、帰りには魚類などの生活用品を買って帰る人たちや、由利地方からの旅人たちが住き帰りの休み場所にしていた所である。

この台地の下に泉が湧いており、夏はここで荷を下し、清水を酌んで渇をいやし、緑蔭の下で汗をふき、冬は老樹の下に寒気をさけながら旅の疲れをいやした。老樹の根本に数体の金勢さまが祭られていた。

この松子台には、悲しい物語が伝えられている。

昔、二井山村に佐々木下総という浪人がおり、ある日娘を連れて松子台に畑を耕しにきた。娘の名を松子といい、みめ美しい娘であった。父が畑を耕しているときに、松子は昼餉をとるための水を酌むために山を下りて行った。

泉の水を酌んで父のもとに帰ろうとしたところ林の中から山賊が現れ、松子を攫って逃げようとした。松子は父に助けを求めて泣き叫んだ。娘の悲鳴に驚いた下総は、鍬を捨てて山を下り、つねに持っていた野太刀をとって賊に迫るや、山賊は山刀を抜いて松子を刺し殺した。

下総は、血に染まった娘の体を抱きながら介抱につとめたが、松子は遂に帰らぬ人となってしまった。娘の亡骸を背負って山を下りた下総は、変りはてた娘の姿に泣いてとりすがる妻とともに松子を手あつく葬り、その菩提を弔うために寺院を建てたのが、いまの端雲寺であると伝えられる。ここには、松子という女狐が棲み、矢神の清松峠に棲む清松という男狐とたがいに往来して恋を語りあったという伝説がある。